

1 はじめに

現代日本語における V テイク・V テクルについてはこれまで様々な分析がなされ、両形式の意味や共起する V に関する対照的分析 (森田, 1968; 吉川, 1976; 寺村, 1984; 今仁, 1990; 澤田, 2008) や形式的意味分析 (中谷, 2008; 日高・新井, 2012; Nakatani, 2013) 等がある。統語構造に関わる分析としては、テイク/テクルの形態論的位置付けを議論した森山 (1988) やテ形複雑述語を分析した Nakatani (2013), V テイクの統語構造を論じた新井・日高 (2016) がある。本発表は、新井・日高 (2016) をベースとしながら、分析対象を V テクルにも広げ、両形式における多義性を対照させながら、統語構造との関係を議論する。先行研究では、例えば次のような分類がなされてきた。

- (1) a. 移動を表す
 - i. 動作・行為の順次性を表す (集めて～, 洗って～, 言って～, など)
 - ii. 平行して行うことを表す ((駅まで) 送って～, 抱いて～, 連れて～, など)
 - iii. 移動するときの状態を表す (歩いて～, 泳いで～, 駆けて～, など)
 - iv. 複合して1つの動作・作用を表す (上がって～, 降りて～, 落ちて～, など)
- b. 時間的継続を表す (生きて～, 暮らして～, 忍んで～, など)
- c. 消滅を表す (失われて～, 消えて～, 死んで～, など)
- d. 変化を表す (変わって～, (夜が) 明けて～, 薄らいで～, など) (森田, 1994, 90-96)

- (2) a. 学校までバスに乗ってきた。(同時移動)
- b. 家でご飯を食べてきた。(継起移動)
- c. 太郎がアメリカから帰ってきた。(移動の方向づけ)
- d. ヤクザが私を脅してきた。(行為の方向づけ)
- e. 空が明るくなつてきた。(変化型アスペクト)
- f. 今日まで一人で店を切り盛りしてきた。(継続型アスペクト)
- g. 海が見えてきた。(非意図的事象の出現) (澤田, 2013)

- (3) テクルは対象の変化が話し手の時点に向かってくる気分を表わすところから、言語主体に直接関係をもつ話し手側の問題(たとえば利害をもつ事からなど)として主観的にとらえ叙述するという意識が働く。テイクは対象が話し手から遠ざかっていく気分を表わすところから、言語主体に直接関係のない第三者の事からとして距離をおいて客観的に眺めるという意識が働く。(森田 (1968, 85), 太字は発表者)

澤田 (2008, 67): 「直示的方向性」のパラメータに加え「時間性」のパラメータを導入。

- (4) 「変化型」アスペクトの「テクル」は、到着点側に立つ話し手の縄張りの中に事象が到来することを表すため、話し手は事象の「結果」を捉えることができるが、「変化型」アスペクトの「テイク」は、出発点側に立つ話し手の縄張りから際限のない彼方に向かって事象が進展することを表すため、話し手は事象の「結果」を捉えることができない。そのため、「テクル」と異なり、「テイク」は、(過去時に生じた) 事象の「結果」が現在時に存在していることを表す「現在完了」の「タ」とは相容れない。

本発表の目標: 「移動」「到達」「アスペクト」を基準とした多義性分類に基づいて両形式の振舞いの違いをあぶり出した上で、その原因を、意味における「移動」と「到達」の位置付けの違いに還元して統一的に説明する。

2 本動詞イク・クルの多義性と意味構造

視点の違いに伴う、移動と到達の位置付けの違い

- (5) 中谷 (2008): 「イク・クルの移動の意味は前提または言語規約的含意」(イク・クルを対称的に分析)
 - a. 彼は公園に行っていた。(完結 (perfenctive) の解釈しかない)
 - b. 彼は公園に来ていた。(完結 (perfenctive) の解釈しかない)
- (6) a. *バスが行った。/バスが行ってしまった。 b. バスが来た。/バスが来てしまった。
- (7) a. イク: V テイクの形にせず本動詞として用いる場合、着点表示が義務的。
- b. クル: 着点, 経路の表示が非義務的。
 - ← 着点: 話者 (の視点保持者 (Empathy Focus; EF: Kuno and Kaburaki (1977))) の位置
 - ← 経路: 話者 (の EF) の位置と移動対象を結ぶ線

クルの着点や経路は予め決まっており、それを敢えて表示するのは「意味的に含意される要素が統語的に現れる」という「外部表示」(影山・由本, 1997) であると考えられる。このため、クルの経路や着点はイクのそれに比べて意味構造上の重要度が相対的に小さく、到達の意味に縛られているイクと異なり、移動と到達の間で自由に振舞う¹。

- (8) a. 特急電車が、今、大阪駅に行っている。(*活動継続² / ?完結)
 b. 特急電車が、今、大阪駅にきている。(?活動継続 / 完結)
 c. もう電車が行っている。(*活動継続 / ?*完結)
 d. もう電車が来ている。(活動継続 / 完結)
- (9) a. イク：移動の意味を内包(非命題レベル)的にしか含まず、外延(命題レベル)では到達の意味を表す³。
 b. クル：移動と到達の二義性を持ち、経路や着点の表示は「外部表示」である。

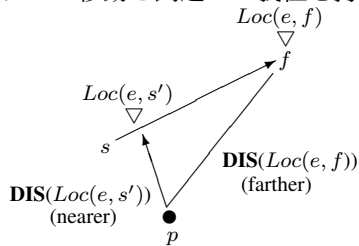


図 1: DIS of ik 'go'.

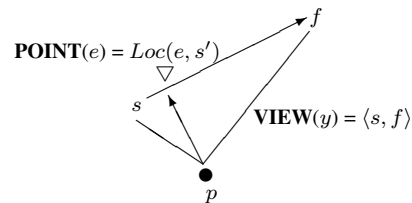


図 2: POV of ik 'go'.

(Arai & Hidaka, 2016)

- (10)
$$\left[\begin{array}{l} ik \\ \text{ARG} = [\text{ARG1}: x, \text{ARG2}: z] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: } \left[\begin{array}{l} s = f, \\ \text{DIS}(\text{Loc}(e, s')) < \text{DIS}(\text{Loc}(e, f)), \\ \text{POV}(p): \text{POINT}(e) = \text{Loc}(e, s'), \\ \text{VIEW}(y) = \langle s, f \rangle \end{array} \right] \\ \text{CONST: } \text{BE-AT}(x, z_{\text{place}}) \end{array} \right] \\ \text{NTS} = [\text{TRIGGER: GO}(x, \text{VIA}(y))] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

イクは話者(の EF)が、移動や状態変化の終結点よりも目撃している地点(時点)の方により近い点から視点をとっていればよく、必ずしも開始点やその時点で対象物の位置する地点そのものから見る必要はない。それに対して、クルは、話者(の EF)が移動もしくは状態変化の終結点に視点を置く必要がある。

- (11) a. { 駅の入り口にいる / *駅から離れたビルの 2 階にいる } ナオミには、
 健が駅に(やって⁴) { 来る / 来ている (活動継続) / ?*来た } のが見えた。
 b. ナオミには、健が駅に { ?行く / ?*行っている (活動継続) / ?行った } のが見えた。

(11a) の「来た」の容認性は、「た」が出来事の完了を表す(金田一, 1976) ためであると考えられる。つまりクルは移動・到達の間で曖昧であるが、「た」と共起できるのは完了性を持つ後者のクルであるということになる⁵。一方、イクは到達を表すので、活動継続を表す「ている」とは共起しない。また、イクの「移動」は非命題の意味で、「移動」と「到達」が同じ意味レベルにないため、眼前での活動や変化に対して用いられる「見える」と共起しにくいと考えられる。また、この視点は移動のテクルに対しても同様にあてはまる。

- (12) a. 自分の家の桜が散ってきた時、縁側にいるナオミは少し悲しくなった。
 b. ?*自分の家の桜が散ってきた時、隣の家の縁側にいるナオミは少し悲しくなった。
 c. (ナオミは自分の家の縁側にいた。) *隣の家の桜が散ってきた時、ナオミは少し悲しくなった⁶。
 d. (ナオミは隣にある健の家にはいた。) 健の家の桜が散ってきた時、ナオミは少し悲しくなった。
 e. (ナオミは隣にある健の家にはいた。) *隣にある自分の家の桜が散ってきた時、ナオミは少し悲しくなった。

(日高, 2015)

¹後述するように、アスペクト用法に関しても、クルはイクに比べて「アスペクト」と「(抽象的)移動」の間を自由に行き来する。

²「自分の乗っている特急電車が」の解釈なら容認可能という話者もあった。これは、話者視点で、目的地が自明である場合に限られるように思われる。「*健が、今、大阪に行っている」のようにすると活動継続の解釈では容認不可能である。

³「ゆく」にすると「竜馬がゆく」「この道をゆく」のように容認性が改善すると思われる(日高・新井, 2012)。

⁴「やって」は「遣る」に由来するが、現代日本語では、移動を表すクルを選択する接頭辞(語)として分析できるかもしれない。

⁵着点表示のない「健が来たのが見えた」なら発見の「た」と解釈して「健の姿が見えた」という意味で可能かもしれない。その場合、健は駅に到着しておらず、「健が向かって来る」というイベントを発見したことになり、テクルの「非意図的事象の出現」に繋がるかもしれないが、詳細な考察は今後の課題としたい。

⁶自分のところに花びらが来る解釈なら可能。

$$(13) \left[\begin{array}{l} k_1 \text{ (到達)} \\ \text{ARG} = [\text{ARG1: } x, \text{ ARG2: } z] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: } \left[\begin{array}{l} s = f, \\ \text{DIS}(\text{Loc}(e, f)) = 0 \\ \text{POV}(p): \text{POINT}(e) = \text{Loc}(e, f) \\ \text{VIEW}(y) = \langle s, f \rangle \end{array} \right] \\ \text{CONST: } \text{BE-AT}(x, z_{\text{place}}) \\ \text{NTS} = [\text{TRIGGER: GO}(x, \text{VIA}(y))] \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$(14) \left[\begin{array}{l} k_2 \text{ (移動)} \\ \text{ARG} = [\text{ARG1: } x, \text{ ARG2: } y] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: } \left[\begin{array}{l} s < f, \\ \text{DIS}(\text{Loc}(e, f)) = 0 \\ \text{POV}(p): \text{POINT}(e) = \text{Loc}(e, f) \\ \text{VIEW}(y) = \langle s, f \rangle \end{array} \right] \\ \text{CONST: } \text{GO}(x, \text{VIA}(y)) \\ \text{NTS} = [\text{TELIC: } \text{BE-AT}(x, z_{\text{place}})] \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

クルが移動と到達の多義性を持つのに対して、イクは「到達」の意味のみを持ち、多義性を表すのは補助動詞としてテイクの形で用いられる場合である。一方、クルは本動詞として移動を表す登録もあるので、テクルにおいても本動詞としても解釈できる。したがって、後述するようにクルの方が統語テストでより柔軟な容認性を示す。

3 新井・日高 (2016) : V テイクの統語構造

新井・日高 (2016) は、次のテストをもとに、(動詞句の統語派生では) 文法化によって主要部移動が抑制されるという立場 (Roberts & Roussou, 2003) から、文法化の進んだアスペクト用法では、イクの主要部移動⁷(V-to-Deix Movement) (Nakatani, 2013) が抑制され、意味的に弱化したテとイクが再分析 (reanalysis) (Hopper & Traugott, 2003) され、機能範疇 DeixP (Nishigauchi, 2014) の主要部を成し、VP 補部を取ると考える。つまり、アスペクト用法ではテイクが1つの形態素として統語派生に導入され、移動用法では再分析が随意的に起こっているとする。

- (15) a. V のみの否定：走らないで行った / (?) 走って行かなかった (移動)
 *溶けないで行った / 溶けて行かなかった (アスペクト)
 b. 尊敬語化：(?) お走りになって行った / 走ってお行きになった (移動)
 *増やしてお行きになった / お増やしになっていった (アスペクト)
 c. テを跨いだ NPI の認可：どこも走らないで行った / (?) どこも走って行かなかった (移動)
 *全く消えないで行った / 全く消えて行かなかった (アスペクト)
 d. イクの選択的修飾：走って急いで行った / (?) 急いで走って行った (移動)
 次第に消えて行った / *消えて次第に行った (アスペクト)

移動用法ではイクが本動詞同様移動を表す点で文法化が進んでおらず、イクに対して VP₂ から DeixP への主要部移動が適用される。また、移動用法の一部ではテが意味的に弱化していると考えられ、この場合、イクに加えてテも DeixP の主要部へ移動するとすれば、アスペクトを表す V テイクに近い容認性を示す説明がつく。ゆえに義務的再分析を被るアスペクト用法は (16b)、随意的再分析を被る移動用法は (16a) あるいは (16c) の統語構造を持つ。

- (16) a. 移動を表す V テイク: ... Speaker/EF_i ... [DeixP pro_i [Deix' [VP₂ [TP V-te] t_j] ik_j]]
 b. アスペクトを表す V テイク: ... Speaker/EF_i ... [DeixP pro_i [Deix' [VP V] te-ik]]
 c. 中間型 V テイク: ... Speaker/EF_i ... [DeixP pro_i [Deix' [VP₂ [TP V-t_k] t_j] te_k-ik_j]]

4 多義性と再分析

4.1 テイク・テクルの分類 — 移動と到達に着目して

- (17) a. 継起移動 1 (「V した後、イク/クル」; 着点あり): 食べて~, 飲んで~
 健は、今朝、学校にちゃんと朝食を食べて { 行った / 来た }。
 b. 継起移動 2 (「V の結果状態としての付帯状況」; 着点あり): 持って~, 買って~
 ナオミはパーティーにローストビーフを作って { 行った / 来た }。
 c. 継起移動 3 (着点なし): 食べて~, 飲んで~, 寄って~
 健はその店でラーメンを食べて { 行った / 来た }

⁷Hayashi and Fujii (2015) は「ピザを作ってもらおう」のような構文で主要部移動が発動されることを論じている。本発表では、テイク・テクル構文においても同様の主要部移動がなされるものが一部あることを主張することになる。

- d. ながら移動 (V の行為を道中継続する解釈; 着点なし): 読んで~, 話して~, (音楽を) 聴いて~
健は発表会場まで新聞を読んで { 行った / 来た }。
- e. V が移動様態動詞 1 (経路あり/着点なし): ~を歩いて~, ~を走って~, ~を這って~
健はその道を歩いて { 行った / 来た }。
- f. V が移動様態動詞 2 (経路なし/着点あり): ~に歩いて~, ~に走って~, ~に這って~
健はその場所に歩いて { 行った / 来た }。
- g. 行為の方向づけ (V テイクにはない): (手紙を) 送って来る, 殴って来る, 脅して来る
*健は友人に本を送って行った。 / 友人がワインを送って来た。
- h. 非意図的事象の出現 (V テイクにはない): 海が見えて来る, 笛の音が聞こえて来る
*海が見えて { *行った / 来た }。
- i. 継続: 健は, 質素に暮らして { 行った / 来た }。
- j. 変化: 極地の氷が溶けて { 行った / 来た }。

4.2 V を跨いだ否定要素の認可

- (18) 継起移動 1 (「V した後, イク/クル」; 着点あり): 食べて~, 飲んで~
 - a. イク: 健はその場所に何も { ?*食べて行かなかった / 食べないで行った }。
健は待ち合わせ場所に何も { ?*食べて行かなかった / 食べないで行った }。
健は, { 友達との待ち合わせ / 大事な試合 } に何も { 食べて行かなかった / 食べないで行った }。
 - b. クル: 健はその場所に何も { 食べて来なかった / 食べないで来た }。
健は待ち合わせ場所に何も { 食べて来なかった / 食べないで来た }。
健は, { 待ち合わせ / 大事な試合 } に何も { 食べて来なかった / 食べないで来た }。
健は何も { 食べて来なかった / 食べないで来た }。
- (19) a. 継起移動 2 (「V の結果状態としての付帯状況」; 着点あり): 持って~, 買って~
 - b. イク: ナオミはその場所に何も { ?*買って行かなかった / 買わないで行った }。
ナオミは実家の弟に何も { ?*買って行かなかった / *買わないで行った }。(与格構文)
ナオミはパーティーに何も { 買って行かなかった / 買わないで行った }。
 - c. クル: ナオミはその場所に何も { 買って来なかった / 買わないで来た }。
ナオミは私に何も { 買って来なかった / *買わないで来た }。(与格構文)
ナオミはパーティーに何も { 買って来なかった / 買わないで来た }。

両形式共に与格構文を取れるが, V テクルは純粋な着点(「その場所に」)を表示できることから, より移動の性質を残していると言える。また, V テクルの方がより与格構文としての容認性が高いが, このことは, クルの着点の話者(の EF)のいる地点であることから, 受益者(人)として解釈されやすいことに起因していると考えられる。

- (20) 継起移動 3 (着点なし): 食べて~, 飲んで~, 寄って~
 - a. イク: 健は, そこで何も { ?*食べて行かなかった / 食べないで行った }。
 - b. クル: 健は, そこで何も { 食べて来なかった / 食べないで来た }。
- (21) ながら移動 (V の行為を道中継続する解釈; 着点なし): 読んで~, 話して~, (音楽を) 聴いて~
 - a. イク: 健は, 道中, 何も { ?*読んで行かなかった / 読まないで行った }。
 - b. クル: 健は, 道中, 何も { 読んで来なかった / 読まないで来た }。
- (22) V が移動様態動詞 1 (経路あり/着点なし): ~を歩いて~, ~を走って~, ~を這って~
 - a. イク: 健はそのコースのどこも { ?*歩いて行かなかった⁸ / 歩かないで行った }。
 - b. クル: 健はそのコースのどこも { ?*歩いて来なかった / 歩かないで来た }。
- (23) V が移動様態動詞 2 (経路なし/着点あり): ~に歩いて~, ~に走って~, ~に這って~
 - a. イク: 健はどの場所にも { ?*走って行かなかった⁹ / 走らないでで行った }。
 - b. クル: 健はどの場所にも { ?*走って来なかった / 走らないで来た }。

⁸VP 全体の否定, つまり「健は移動しなかった」の意味であれば容認可能なように思われ, それは「歩いて来る」の場合も同様である。

⁹VP 全体の否定は容認可能なように思われる。また, V のみの否定も「走って」に対照強勢を置けば可能であるが, 通常の韻律ではその解釈は難しい。

- (24) 行為の方向づけ (V テイクにはない) : (手紙を) 送って来る, 殴って来る, 脅して来る
 クル: 健が僕に何も { 送って来なかった / *送らないで来た }。
- (25) 非意図的事象の出現 (V テイクにはない) :
 クル: 視界には何も { 見えて来なかった / *見えないで来た }。
- (26) 継続: (暮らして〜) a. イク: 健は全然 { 質素に暮らして行かなかった / *質素に暮らさないで行った¹⁰ }。
 b. クル: 健はこれまで全然 { 質素に暮らして来なかった / 質素に暮らさないで来た }。
- (27) 変化: a. イク: 極地の氷は (何万年もの間) まったく { 溶けて行かなかった / *溶けないで行った }。
 b. クル: 極地の氷は (これまで) まったく { *溶けて来なかった / 溶けないで来た }。

「行為の方向づけ」はアスペクト用法と同様に再分析が義務的である (24) ことから, 移動よりもアスペクトに近いことが示唆される。(26, 27) で, 「継続」「変化」のクルは再分析が非義務的である振る舞いを示すことから, イクがアスペクト補助動詞と化しているのに対して, クルは補助動詞でもあるが, 抽象的(時間上の)移動を表す本動詞でもあるという多義性を備えていることが示唆される。このこともクルが移動を表しやすいくことから導出する。

4.3 V のみの否定解釈

- (28) 継起移動 1 (「V した後, イク/クル」; 着点あり): 食べて〜, 飲んで〜
- a. イク: 健はその場所に朝食を { *食べて行かなかった / 食べないで行った }。
 健は待ち合わせの場所に朝食を { ?食べて行かなかった / 食べないで行った }。
 健は, { 友達との待ち合わせ/大事な試合 } に朝食を { 食べて行かなかった / 食べないで行った }。
- b. クル: 健はその場所に { 朝食を食べて来なかった / 食べないで来た }。
 健は待ち合わせの場所に朝食を { 食べて来なかった / 食べないで来た }。
 健は, { 待ち合わせ/大事な試合 } に朝食を { 食べて来なかった / 食べないで来た }。
 健は朝食を { 食べて来なかった / 食べないで来た }。
- (29) 継起移動 2 (「V の結果状態としての付帯状況」; 着点あり): 持って〜, 買って〜
- a. イク: ナオミはその場所にお土産を { *買って行かなかった / 買わないで行った }。
 ナオミは叔母に酒を { ?買って行かなかった / *買わないで行った }。(与格構文)
 ナオミはパーティに酒を { 買って行かなかった / 持たないで行った }。
- b. クル: ナオミはその場所にお土産を { 買って来なかった / 買わないで来た }。
 ナオミは僕に酒を { 買って来なかった / *買わないで来た }。(与格構文)
 ナオミはパーティに酒を { 買って来なかった / 買わないで来た }。
- (30) a. 継起移動 3 (着点なし): 食べて〜, 飲んで〜, 寄って〜
- b. イク: 健は, そこでお昼ご飯を { ?食べて行かなかった / 食べないで行った }。
 c. クル: 健は, そこでお昼ご飯を { 食べて来なかった。 / 食べないで来た }。
- (31) ながら移動 (V の行為を道中継続する解釈; 着点なし): 読んで〜, 話して〜, (音楽を) 聴いて〜
- a. イク: 健は, 道中, その雑誌を { *読んで行かなかった / 読まないで行った }。
 b. クル: 健は, 道中, その雑誌を { ?読んで来なかった / 読まないで来た }。
- (32) a. V が移動様態動詞 1 (経路あり/着点なし): ~を歩いて〜, ~を走って〜, ~を這って〜
- b. イク: 健はそのコースを { *歩いて行かなかった¹¹ / 歩かないで行った }。
 c. クル: 健はそのコースを { *歩いて来なかった / 歩かないで来た }。
- (33) a. V が移動様態動詞 2 (経路なし/着点あり): ~に歩いて〜, ~に走って〜, ~に這って〜
- b. イク: 健は大阪駅に { ?歩いて行かなかった / 歩かないで行った }。
 c. クル: 健は大阪駅に { *歩いて来なかった / 歩かないで来た }。

¹⁰ 「これからは決して質素に暮らさないで行こう」のように, 意図性の意味が読み取れる場合は容認可能であるが, これは, 「この手で行こう」等の「行く」等と同様, 「アスペクト」ではなくむしろ「抽象的な移動」のように分析されるべきと考えられるが, 詳細な分析は今後の課題としたい。

¹¹ 全体の否定, つまり「行かなかった」という解釈なら可能。「歩いて来なかった」についても同様。ただし, V に対照的な強勢を置けば V のみの否定は可能である。これをどう説明するかは今後の課題としたい。

- (34) 行為の方向づけ (V テイクにはない) : (手紙を) 送って来る, 殴って来る, 脅して来る
 クル: 友人が本を { 送って来なかった / *送らないで来た }。
- (35) 非意図的事象の出現 (V テイクにはない) : クル: 海が { 見えて来なかった / *見えないで来た }。
- (36) 継続: a. イク: 健は, { 質素に暮らして行かなかった / *質素に暮らさないで行った }。
 b. クル: 健はこれまで { 質素に暮らして来なかった / 質素に暮らさないで来た }。
- (37) 変化: a. イク: 極地の氷は { ?溶けて行かなかった¹² / *溶けないで行った }。
 b. クル: 極地の氷は { ?溶けて来なかった / 溶けないで来た }。

5 まとめ

表 1: V テイク・V テクルの多義性と統語テスト

	V を跨いだ NPI 認可		V のみの否定解釈		再分析	
	V テイク	V テクル	V テイク	V テクル	V テイク	V テクル
a. 継起移動 1(着点あり)	?*	✓	?*	✓	*	optional
b. 継起移動 2(付帯状況; 着点あり)	?*	✓	?*	✓		
c. 継起移動 3(着点なし)	?	✓	?	✓	optional?	optional
d. ながら移動 (着点なし)	?*	✓	?*	✓	*	optional
e. V: 移動容態動詞 1(経路句あり)	?*	?*	*	*	*	*
f. V: 移動容態動詞 2(着点句あり)	?*	?*	?*	?*		
g. 行為の方向付け	—	✓ (*V 分離)	—	✓ (*V 分離)	—	obligatory
h. 非意図的事象の出現	—	✓ (*V 分離)	—	✓ (*V 分離)	—	obligatory
i. 継続	✓ (*V 分離)	✓ (V 分離)	✓ (*V 分離)	✓ (V 分離)	obligatory	optional
j. 変化	✓ (*V 分離)	✓ (V 分離)	? (*V 分離)	? (V 分離)	obligatory	optional

(✓: 容認可, —: 元々用法が存在しない)

以上から, 移動の場合, V テクルの方が再分析を受けやすいということが言える。また, アスペクト的な「継続」「変化」については, V テクルの方がより柔軟な振舞いを示し, アスペクトとしても (抽象的) 移動としても解釈可能であるのに対して, V テイクは専らアスペクト補助動詞として振舞うことを示唆している。さらに, 「行為の方向付け」「非意図的事象の出現」のテクルは移動というよりもアスペクト補助動詞として分析する方が妥当であることを示しており, むしろこの2つを別々の用法とする根拠は薄く, 「アスペクト」として, これらがV テイクの「変化」と対応しているとする分析の方が妥当であるように思われる。

参考文献

- Arai, F. & Hidaka, T. (2016). A Formal Analysis of Japanese V-yuku and its Grammaticalization. *Japanese/Korean Linguistics*, 23.
- Hayashi, S. & Fujii, T. (2015). String Vacuous Head Movement: The Case of V-te in Japanese. *Gengo Kenkyu*, 147, 31–55.
- Hopper, P. J. & Traugott, E. C. (2003). *Grammaticalization*. Cambridge University Press.
- Kuno, S. & Kaburaki, E. (1977). Empathy and Syntax. *Linguistic Inquiry*, 8, 627–672.
- Nakatani, K. (2013). *Predicate Concatination: A Study of the V-te V Predicate in Japanese*. Kuroshio Publishers.
- Nishigauchi, T. (2014). Reflexive Binding: Awareness and Empathy from a Syntactic Point of View. *Journal of East Asian Linguistics*, 23 (2), 157–206.
- Roberts, I. & Roussou, A. (2003). *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 新井文人・日高俊夫 (2016). 「V テイクの再分析に関する統語論的考察」. *KLS*, 36, 1–12.
- 今仁生美 (1990). 「V テクルと V テイクについて」. 『日本語学』, 9-5, 54–66.
- 影山太郎・由本陽子 (1997). 『語形成と概念構造』. 研究社出版.
- 金田一春彦 (1976). 「日本語動詞のテンスとアスペクト」. 金田一春彦 (編), 『日本語動詞のアスペクト』, pp. 27–61. 麦書房.
- 澤田淳 (2008). 「変化型」アスペクトの「テクル」「テイク」と時間性-タ形「テキタ」と「テイツタ」の非対称的な分布に注目して」. 『日本語の研究』, 4-4, 63–69.
- 澤田淳 (2013). 「日本語ダイクシスの歴史的展開-「V て来る」の拡張パターンを中心に-」. 『平成 24 年度科学研究費による国際モダリティワークショップ-モダリティに関する意味論的・語用論的研究-発表論文集』, 第 4 巻, 1–20.
- 寺村秀夫 (1984). 『日本語のシンタクスと意味 II』. くろしお出版.
- 中谷健太郎 (2008). 「テクル・テイクの動詞共起制限の派生」. 『レキシコンフォーラム』, 4, 63–89.
- 日高俊夫 (2015). 「「来る」の文法化について-「V(て)来る」のアスペクト用法-」. In *KLS* 35. 関西言語学会.
- 日高俊夫・新井文人 (2012). 「「V テイク」の意味と派生について」. 『日本言語学会第 145 回大会予稿集』, pp. 352–357. 日本言語学会.
- 森田良行 (1968). 『行く・来る』の用法」. 『国語学』, 75, 7587.
- 森田良行 (1994). 『動詞の意味論的研究』. 東京: 明治書院.
- 森山卓郎 (1988). 『日本語動詞述語文の研究』. 明治書院.
- 吉川武時 (1976). 「現代日本語のアスペクトの研究」. 金田一春彦 (編), 『日本語動詞のアスペクト』. むぎ書房.

¹²この容認性低下は「溶けなかった」と言えばいいだけでイクが意味的に余剰であるためであると考えられる。(37b) に関しても同様。